月刊 第516号

祝日（ウミノヒ）は小鯛の塩やきいかが

あとのイシャゴロシが格別

海の中で、魚たちが自分を自慢し合ったことがあった。夏は、なんといっても、ネズラが時節物で最高といったら、キスはサシミや天プラが一番。ノドグロが口をだして、おれのウマサを知らんか。タコが今時期でないども、冬場になれば、おれが足つんだすだけで、人間が高い値をつける。するとハタハタがおれのツケ焼きたべちゃネラなんて問題でないサという。

分ボの寒マスがとりすまして、おれは高級料亭の大臣席におさまるからなあと大いばり。そこへ鯛が顔をだした。

お前たちなんだかんだ手前味噌ならべているども、なんてたって、魚の中の魚はおれだぞ。なんだ小鯛のくせに生意気なといわれた鯛がおごそかに宣言した。

人間どもがいっているじゃないか、くさっても鯛だとなあ。海の一座は、シーンとおさまったという。作り話だが。

たしかに、昔から鯛は、最高の席のお祝いのヌシである。

大正のおわりから、昭和の始めにかけて、寺泊浜は不景気風が吹いて、小学校以上の学校へあがれるユトリのある家庭がすくなかった。さらに、若いものが肺病にかかって、ろくな薬もたく、栄養をとるため、家計をくいこみ、あげくのはて、次々死んだ。

それでもまだ漁師が沢山いて、鯛の水あげも多く、大町浜では、大鯛のセリ市場がひらかれた。親たちは、子供に栄養をとらせるために、心をくだいた。

小鯛の塩やきを子供にたべさせ、その残した頭と骨に熱湯をそそぎ、ショウユで味つけて小鯛スープにして「オスイモン」がわりとして子供にすわせた。

案外味がよいので、親のスープもおねだりして吸った。

病人にも、このスープを運んだ。あまり栄養があるので、昔から鯛のスープを医者ごろしとよんだ。

今でも、誕生日や、いわい事の日には、嫁が小鯛の塩やきをくばる。八十才老人になっても、子供のころの習慣で、医者ごろしを好む。

この間、九十才で心臓病で逝去された坂井町の樺下キイさんは、お花やお茶の先生を永くされた寺泊生れの賢夫人であるが、死なれる前々日に、病院で、「鯛のサシミ」がたべたいといわれ、おいしいおいしいとよろこばれたが、いよいよ死なれる前日、こんどは、「鯛のオツユ」がの

みたいといわれ、希望がかなえられ御満足の大往生だったと人がきかせてくれた。

なじよもおらだって、おわりが近づいたら、末期の水よりは、地の小鯛のオスイモノで、クチビルをうるおしてまいりましょうやと思ったことであった。

佐渡赤泊と仲よし50回

昭和十一年から佐渡の対岸赤泊村との親善大会が始まった。戦争で中断したが、戦後再開され、ことしで五十回目の両泊親善の大会が、七月十七日、十八日に赤泊村を会場に、にぎにぎしく開かれた。

十七日には、朝九時から寺泊側の出発式が港で開かれ、寺泊町長高橋誠さんほか、町会議員や教育委員など関係者三十余人、各選手百四十名が参加して総勢百七十余名が、カーフェリー「えっさ丸」に乗り込んだ。

幸い快晴で、波もさざ波で、親善交流には、最高の日であった。

選手の中でも、老人組の「ゲートボール」の組は猛練習をかさね、選抜されたチームだった。

その出発状況は一ページの写真の通りである。

見送りは少数だったが、五十回をフシ目として、いよいよ濃密な親善運動が展開されることだろう。

このあと、両泊子ども交歓会が、七月二十四日、二十五日に、こんどは、寺泊会場で開かれ赤泊から同じ「えっさ丸」に乗って、赤泊の子供たちがやってきた。

寺泊の会場は、文化センター「はまなす」などであった。

ことしで二十回目になる。

モリ沢山の行事を、次々とみごとにこなして、キメこまかな、ゆきとどいた指導のもとに、みごとな交歓会がおひらきとなり、両泊の子供たちにとって、一生わすれられない感銘を残して、赤泊の子供たちを乗せたえっさ丸の船影が静かに遠のいて行った。

お盆だもの・先祖が呼んでるファーッと寺泊いかが

不景気の声がどこでもここでも常識のあい言葉。

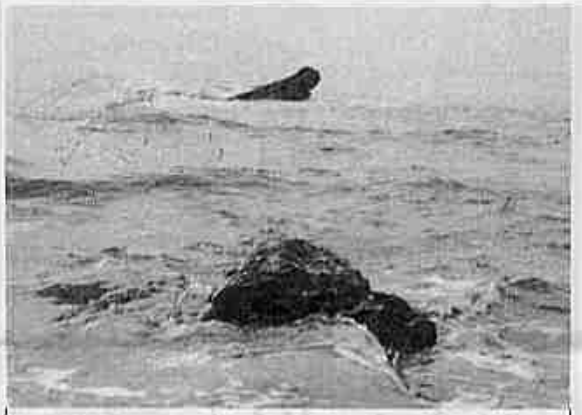
そのくせ、遊んであるくゼイタク旅行の海外消費のでかい話がきこえる。

この暑さウナギのぼりの下で、ボソボソケンヤクして、ウナギをうちでつくるのも、けなげにして、しおらしいけど、どうです、わが故郷寺泊へ、奥様をタゴめて、スタートしませんか。

思いついたが、吉日。親類、知友に顔だすと、手土産なんかわずらわしいからテブリハチカン（素手）で、寺泊の宿で、外国人スタイルでだれにも知られず、ふるさとを満喫しなさったらいかがです。

つきましては、寺泊浜のすばらしい宿を紹介しておきましょう。

浜のあねごは、。オシロイいらぬ、魚のウロコに肌光るとして、



寺泊浜の南海岸に七ツ石の村がある。夏は民宿や海水浴で繁盛している。
むかしから海辺に、七ツの岩がある。クジラかオットセイみたいな岩が波にもまれている。
春三月の始めは、この岩にアオサがよってくる。
早春の磯のかおりは、味噌汁にしても、味噌ずけにしても、ふるさとの人たちの好物。水もきれいだ。

佐渡ヶ島が年間を通じてバッチリ見れる日は、すくない。
今日は上等の方だ。佐渡は八里のサザ波こえて、鐘がきこえる寺泊佐渡おけさの一節。
本土から一番佐渡にちかい寺泊。だからむかしは寺泊から船が出た。それが種々な物語をうんだ。大声でよべば、むこうから返事がくるかと思うほど接近感がある。対岸は、仲よしの赤泊。七月になると、行ったりきたり。

ナギサが遠くなって、中央海水浴場の浜茶屋のたらびは、遠望にちかい。あそこからここまで海水浴客は、歩いてくる。そこで、浜茶屋の一軒がナギサ近くに、この分店を出して人気を呼んでいる。
そばなどの軽食や、ラガービールなどに、ナギサに客があつまる。
今日は三十八度をこした暑さ。

夏休み直前の学校が浜にきて、プールとちがう海水にしたしむ。
まだ一般の海水浴客のこない内だ。
念入りな準備体操をしてから海に入ってゆく。夏雲が、弥彦山にかかっている。
ここの海水浴がおわるとむこうの水族博物館の見物にゆくかもしれない。　（金山海水浴場）

寺泊港まつりは、八月六日、七日。
花火や民謡踊りやいろいろと金のかかる演出が海の寺泊をもりあげる。
この機会に、遠くの寺泊人が帰ってくる。お墓まいりかたがたである。

美人ぞろいの寺泊へどうぞと、越後寺泊温泉郷組合が宣言。

ふじたや　七五―三二二一
住吉屋　七五―三二二八
田甚　七五―三三七七
寺泊観光センター　七五―二三五〇
のぞみ温泉　七五―二三二三
寺泊温泉北新館　七五―二一七二

海がすぐ目の前　金山の

清原屋　七五―二三三〇
田辺屋　七五―二四二八

きれいな砂浜と、碧く透き通る海として郷本海岸

第一ホテル　七五―二五四一
あだち　七五―二〇一九
七ツ石　七五―三八二九
大和屋　山田海水浴場　七五―三四八五

海浜民宿として中央海水浴場

汐楽　七五―三二八一
かもめ　七五―二五一二
にしやま　七五―二〇五九
金徳　七五―二五一一
みます　七五―二三六五
いしや　七五―二五七五
なぎさ　七五―二三七五
やまき　七五―二五一四
さくらや　七五―二五一四
はまや　七五―二六四一
やまけ　七五―二三二四
きんぱち　七五―四二五八
王将茶屋　七五―七五五九
市兵衛茶屋　七五―二八三〇
富士屋　七五―三三三七
双葉茶屋　七五―三〇〇四
野積茶屋　七五―四八五一
浦茶屋　七五―二七三一
まつや　七五―二八二一

寺泊浜の南端山田の村は、小さな集落のその入り口に、みごとな山田海岸駅が作られ、外来の人たちがひとときここで民ぬけの静けさをたのしんでいた。
少しでも感じのよい環境づくりを願う山田の人々のあたたかく誠実な投資で出来た駅。
木道、駐車場そしていつきても清潔に運営されている。

長八　七五―四七五五
渡安旅館　七五―二三〇〇
日本海　七五―五五五五
飛鳥　四一―六一一一
山庄　七五―二一四三
まるぜん　七五―二七八七
大三庄　七五―二〇五一
太六　七五―三〇八九
山長　七五―一九六五
丸金丸　七五―三四三四
（市外局番　〇二五八）

備考

これだけあるんですから、いくらこんでも、どこかであきがあります。

経費御協力

（敬称略・順不同）

東京都	金内　熱	金壱万円
〃	金内　之雄	金壱万円
新潟市	金内　稔	金壱万円
〃	丸山　静枝	金五千円
〃	佐野喜久雄	金五千円
〃	丸山　昌夫	金五千円
〃	小黒　正夫	金五千円
〃	渡辺　宏平	金五千円
〃	小林六三郎	金五千円
〃	新潟谷藤三郎	金五千円
〃	田村　精	金五千円
〃	渡辺　弘	金五千円
〃	菊池　正芳	金三千円
〃	納谷　ミヨ	金三千円
〃	礼木　郡二	金三千円
〃	斎藤　トシ	金三千円
三島市	北沢　順治	金三千円
川口市	阿部　昌純	金三千円
〃	平石美和子	金三千円
上尾市	近藤　トイ	金五千円
群馬県	松井　マキ	金五千円
府中市	川上　憲一	金壱万円

世の中が変ってきて、先祖のお墓を捨ててかいりみない時代がきて、どこの寺も、無縁になったお墓の始末やお骨の合同埋葬に苦労している。この有縁無縁の土マンジュウ明治天皇がむかしこの附近でよまれた歌のナギサの岡。佐渡、弥彦をながめる高台のこの塔の中に、次々と子孫に捨てられたお骨がおさまってゆく。電話をかけると、新しい墓は、クジビキで求めた小さい墓。先祖の入る余地はありません。適当に始末してと返事がきた。

野馬原保東	石井　守一	金五千円
国立市	佐藤　寛子	金三千円
東松山市	上田　マリ	金三千円
鶴川鶴野	浅野　宣子	金五千円
流山市	足立　敬	金五千円
千葉四街道市	外山　健太	金三千円
浦和市	松永　達一	金五千円
尼崎市	笹間　仁吉	金三千円
京都亀岡	山本　鉄也	金三千円
与野市	内田　嫺	金五千円
長野市	渡辺　キク	金三千円
岐阜市	福田　幸子	金五千円
栃木藤原町	小住フジエ	金壱万円
北海道石狩	外山　正明	金壱万円
横浜市	小林　喬嗣	金壱万円
あきる野市	栗山　節子	金三千円
前橋市	三上　英雄	金五千円
三条市	松下　富市	金三千円
分水町	岩船鉄次郎	金三千円
寺泊大町（故）	渡辺八治郎	金壱万円
寺泊小川町	平石　孝義	金三千円
〃上荒町	島田　紀男	金三千円
〃大町	生福寺	金五千円
〃	大宮　和正	金三千円
〃上田町	中川　重雄	金三千円
〃	池田　きよ	金三千円
〃	武沢　よみ	金三千円
〃	外山　哲夫	金三千円
〃上荒町	本間　重光	金三千円
〃	長谷川さき	金三千円
〃白岩	小黒　太郎	金三千円
〃松沢町	雲崎　綾子	金三千円

あとがき

寺泊浜本番の夏がきました。浜通りは、南北ともに車の列で大にぎわいです。

車社会のめぐみです。不景気のおかげで、自家用車のファミリートラベルがたのしめるのです。車内をのぞくとキッチンが浜に移動してきた感じで、宿泊料のいらない気安さが寺泊浜にあふれています。

二十四日は、ウシの日です。ツユがあけました。浜にウナギを焼くかおりが立ちこめました。

そんな浜辺を見おろす高台の庭で、今月の便りをかいています。夜です。

ホタルが五、六ピキ闇の中を浮遊しています。舞っている感じです。

「ホー、ホー、ホタルこい」子供のころの感動がよみがえります。

車で、二、三分走ると、ホタルの森があります。ホタルを知らない都会の人がくると、カンタンに案内します。

午後八時、車のライトを消し、ホタルの出番を待ちます。山の清水のこぼれるところがホタルのふる里です。

タンポのない山のタモトです。食用蛙とヒキガエルが夜中にケンカして、朝マケタ食用蛙の遺体を時々埋葬します。

ウサギもタヌキも出てきます。カナカナセミがなきだしました。ウグイスが姿をけし、ホトトギスが健在です。

交通事故死が二件。酒のみ運転が死をよびました。

ふるさと寺泊を新しい時代にマッチさせようと、公私ともにチカラを入れています。

今のところ、八月六日、七日の港まつりに、ふるさとの熱情がこめられています。

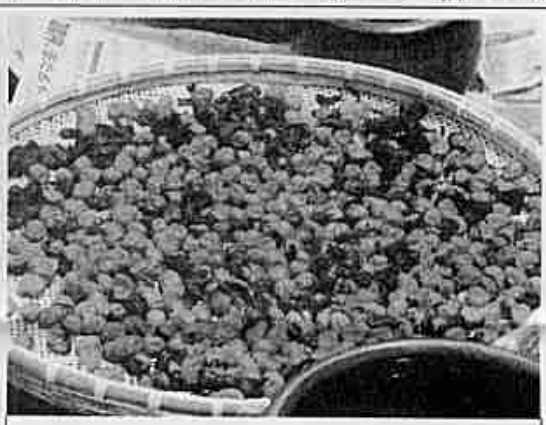
毎日、快晴の夕陽がたのしみです。ツユ空では、夕陽が拝めません。二十四日からの夕陽は、雲ひとつない海のかなたに、真紅の太陽が沈んでゆきます。

一刻一刻のながめは、寺泊浜ならではのめぐみです。

誌友がポツポツ亡くなられました。松沢町岡田呉服店の渡辺千代さん。シモのシノハラから嫁入り。蔵場町の小笠原健三さん。永く外勤さんにつとめた。荒町の金内キセさんは新潟で死去。

朝早くドライブすると、犬の散歩とマラソンの若人に出あいます。姿勢を正して強歩する健康人の歩みも見かけます。この二十七日の暑さ三十八度三分。暑さの中、浜の空気を呼吸する。朝の風物詩です。

寺泊のホテル、旅館のサービス精神は、どこもゆきとどいております。親切の中のあたたかみ、寺泊浜らしい土徳のにじみでた語りかけの宿です。どうぞこの七、八月の内に、ふるさとに宿取って下さい。



七月、ツユがあけた途端、嫁さんの梅ぼし作業が始まる。ことしは梅の豊作。少し小粒だが、なんとか梅ボシになる。たくさん残った梅は、捨てるのがモッタイないので、35度につけて梅酒つくり。年々味にまろみとコクが出て、七、八年モノが一番おいしい。ワインでうすめて水水にして食前酒。酒をのまぬ女房のポッとそめた顔色をみて男衆は、満足の意を表す。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共（百円）
編集人　一窪沢　泰忍
発行人　中村　興樹
発行所　新潟県寺泊町
ふるさとだより
郵便番号　九四〇一二五〇二
ダイヤル局番　〇二五八七五
電話　二〇二九番
振替番号〇〇六二〇三五七四五
印刷所　吉野印刷株式会社